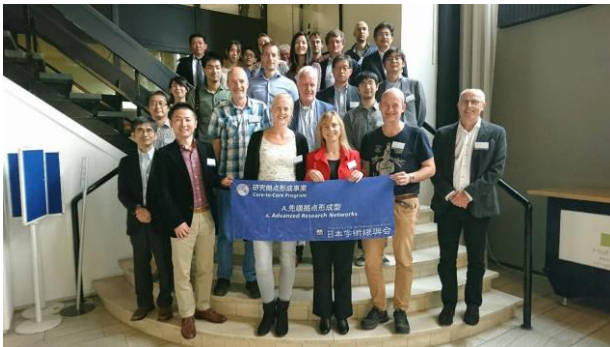


拠点形成研究交流報告：オランダワーゲニンゲン大学、ユトレヒト大学との粘膜免疫と乳房炎に関するワークショップ開催

オランダの研究拠点校であるワーゲニンゲン大学と協力校であるユトレヒト大学の粘膜免疫学者が、ワーゲニンゲンに集結し、10月17、18日に「粘膜免疫と乳房炎に関する国際ワークショップ」を開催しました。参加者は総勢25名（日本側12名、オランダ側13名）で、非常に熱いディスカッションを繰り広げました。2日間のスケジュールで実施したプログラムは、4つのセッションより構成され、計12題の口頭発表（日本側から6題、オランダ側から6題）が行われました。本企画は、昨年度に東北大学農学研究科食と農免疫国際教育研究センターが、ワーゲニンゲン大学とユトレヒト大学と合同で実施したオランダライデン大学ローレンツセンターワークショップ「Innate Immunity of Crops, Livestock and Fish: “The Dawn of Agricultural Immunology”」の第二段として実施され、その時話し合われた農免疫に関する広い内容の中で、さらに焦点を絞ったテーマの下で、国際共同研究を本格的に実施するための課題を策定することを目的として企画されました。乳房炎に対する予防・治療技術開発は、獣医畜産領域の中でもきわめて必要性の高い、世界レベルの課題です。今回実施したワークショップを通して、各国が推進する、粘膜免疫学に立脚した乳房炎ワクチン開発に向けたアプローチの仕方にいくつかの相違点が存在すること、また、乳牛の乳房の免疫学研究は未だに発展途上であり、国際的な視点で、同じ目標（乳房炎予防・治療技術開発）に向かった協力体制が必要不可欠であることが明確となりました。今後、若手研究者や博士課程大学院生を中心とした研究交流を通して、本JSPS研究拠点形成事業の中で、この乳房炎研究を大きく進展させるための基盤が形成されました。なお、本ワークショップは、JSPS二国間交流事業（オランダとのセミナー）の支援を受けて実施したものであり、研究拠点形成事業メンバーも本ワークショップに参加することで、研究拠点形成事業の今後の方向性を確認しました。本セミナーで提案された今後の国際共同研究課題は、研究拠点形成事業の中で実施することになります。



ワークショップ後の集合写真



本ワークショップオーガナイザー
(野地准教授、Savelkoul教授)



ワークショップで発表する学生達



文責：野地智法(感染免疫ユニット)